地質ニュース606号，6－9頁，2005年2月
Chishitsu News no.606, p.6－9, February, 2005

GeoExpo2004出展報告

武藤　奈緒子[1)]

地質調査企画室では，2004年にイタリアで開催された万国地質学会議（IGC）の一環として行われたGeoExpo2004にて，地質調査総合センター（Geological Survey of Japan，以下GSJと略記）紹介のブース展示（写真1）を行いました．ここでは，その概要を報告します．

過去の出展状況

本稿を書くに当たり，今までに行われたIGCでの旧地質調査所のブース出展について，少し調べてみました．

古くは，第3回（1885年，ベルリンにて開催）で既に地質図や標本を出品したとの記録がありました（清水，1991）．最近の出展については以下の通りです．

- 第26回（1980年，パリ）：地質図・海洋地質図などを貼っただけの簡単な展示だったとのことです（本座，1989）．
- 第27回（1984年，モスクワ）：国際地質図展（ジオカルタ’84）に地質図類を出展．しかし，何しろ旧ソ連時代のこと，前もって送っておいた展示物の扱いをめぐり，会場側と多少トラブルがあったことが記されています（盛谷，1989）．
- 第28回（1989年，ワシントン）：地質調査所が2区画，第29回万国地質学会議組織委員会が1区画を借りて出展．この時は，ライマン作成の地質図の展示や，大島噴火のビデオ上映など，次回の日本での開催を控え，展示にも力を入れたようです（鈴木ほか，1989）．
- 第29回（1992年，京都）：多数のパネルや鉱物標本の展示，雲仙普賢岳の噴火記録ビデオの放映，出版物の展示と即売など，やはり自国での開催とあって，充実した展示を行っていたことがうかがえます（鳥居，1993）．

写真1　GSJブースの全貌．

第30回（1996年，北京）でも出展者リスト（Xu and Wang, 1997）に名を連ねてはいますが，詳細については分かりませんでした．第31回（2000年，リオデジャネイロ）では，Exhibitor's Guide（31st International Geological Congress, 2000）の出展者リストを見る限りでは出展しなかったようです．開催地が日本から遠かったためでしょうか？

出展に向けて

参加申し込みは前年度のうちに済ませていましたが，具体的に計画を立て始めたのは2004年5月になってからのことでした．5月中旬の打ち合わせでおおよその展示内容を決め，当時の地質調査情報部より下川と西岡が，当時の国際地質協力室より大久保，松林，武藤が展示担当者として参加することになりました．その後紆余曲折を経て，8月1日付の組織改編により地質調査情報センターが発

1）産総研 地質調査情報センター 地質調査企画室

キーワード：IGC，GeoExpo，展示会

足し，前述の2つの組織は統合されて地質調査企画室となりました．

また，会期中の展示立ち会いは，研究ユニットからの参加者にも協力してもらうことにしました．

今回の展示のあらまし

展示ブースは，幅4m，奥行3mの1区画を借り受けました（写真2）．展示スペースの他，付属品として団体名表示板，カーペット，電源設備（220V，1500W），スポットライト2つ，机1つ（120cm×80cm×75cm），椅子2脚，くずかご1つがセットになっていました．

展示内容としては，GSJの概要を紹介したパンフレット配布，各研究分野を紹介するポスター掲示とリーフレットの配布，そしてパソコンによるデモンストレーションを行いました．

GSJの組織紹介に当たっては，5月および8月の組織改編を盛り込んだ新しいパンフレットを作成しました．ただし，印刷がIGCの開始には間に合わず，会期途中からの参加者に，手分けして持参してもらうこととなりました．

研究紹介は，2003年のIUGG（国際測地学・地球物理学連合）総会時に行った展示の内容を再利用しました．スペースの都合などもあり，掲示出来たものは，

- Geophysical Mapping
- Energy Resources
- Geothermal Energy
- Volcano
- Earthquake Hazard Prediction
- Groundwater Environment

となりました．今回紹介できなかった研究分野の皆様，申し訳ございませんでした（リーフレットはこの他の分野についても配布しました）．

ノートパソコンによるデモンストレーションでは，主に，東・東南アジア地質構造図と，富士山をはじめとする火山地質図を紹介しました．東・東南アジア地質構造図はCCOP Technical Bulletin Vol. 27およびVol. 31として，また富士火山地質図は数値地質図G-9としてCD-ROM化されていますが，今回のデモンストレーションは，CD-ROMのデータそのままではなく，画像が3Dの動画で表示出来るように手を加えてあり，立体地質図の上空を遊覧飛行していくような映像が楽しめるようになっています．あらかじめ設定された映像を流すだけではなく，自分でキーボードやマウスを操作して，好きな方向から見た画面を表示することも出来ます．

写真2　準備中の会場の様子．

この他に，11月のCCOP（東・東南アジア地球科学計画調整委員会）年次総会・管理理事会の日本での開催を控え，CCOPに関する資料の展示と配布も行いました．

会場にて

展示会の会場となったのは，Fortezza da Basso内のCentral Pavilionです．

参加者に配布されたGEOEXPO EXHIBITOR'S GUIDE（32nd International Geological Congress, 2004）によると，今回は全部で71団体が出展しており，そのうち，地元イタリアからの参加が約4割を占めていました．各国の地質調査所や地質学会，出版社，地質調査関連企業などが一堂に会し，多くのブースで地質図や書籍などの無料配布や割引販売が行われており，この機会にとばかりあれこれと手に入れた人も少なからずいたようです．

さて，かなり凝った展示をしているブースもある中（写真3，4），GSJのブースは比較的地味でしたので，始まる前は，これで人が集まるのかと一抹の不安がありました．しかし，いざ始まってみると，興味を示して立ち寄ってくださる方は結構いるもので，最終的には，用意したパンフレット類が足りなくなるほど多くの来訪者がありました（写真5，6）．

写真3　ひときわ人目を引いていたGeological Society of Chinaのブース．

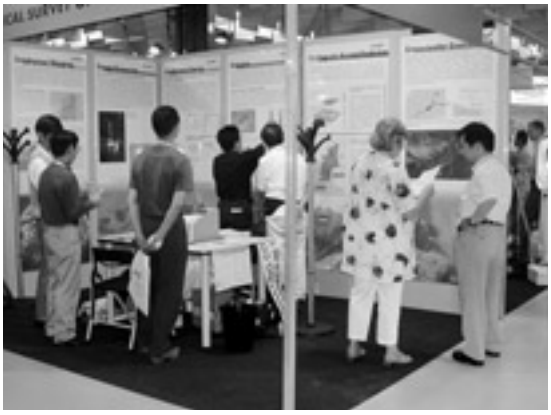

写真5　展示の解説をするGSJスタッフと，説明に聞き入る来訪者たち．

写真4　会期中のひとこま．アトラクションの準備？（実態は不明です）

写真6　研究紹介のリーフレットを熱心に読んでいる方々．

今回紹介した研究分野の中で特に多くの関心を集めていたのは，水資源と火山の研究でした．水資源については現在世界的に注目されていること，火山については，地元イタリアも火山の多い国であるために関心が高いことがうかがえました．

地熱エネルギー研究紹介のポスターに載せた写真も，注目の的となりました．こんもりとした塚のような物体が噴水のようにお湯を吹き上げている光景なのですが，「どこの，何の写真か？」という問い合わせが相次ぎました．筆者には，最近の地質ニュースに掲載されていた，という漠然とした記憶はあったものの，それ以上のことは分からず，その場では残念ながら回答出来ませんでした．帰国後に調べてみたところ，これは，2002年度に行われた第1回地質写真コンテストで見事グランプリを獲得し，地質ニュース第585号（2003年5月号）の表紙を飾った「フライランチ　ガイザーズ（ウォーズ温泉）」の写真であることが判明しました（玉生, 2003；谷田部ほか, 2003）．地質標本館のホームページにも掲載されていますので，ご興味のある方はご覧下さい．

パソコンによるデモンストレーションも好評で，興味深そうに眺めていく方や，自分でも操作を試して楽しんでいく方が数多くいらっしゃいました（写真7）．このデータを入手したいという方もいたのですが，動画付きのものは展示専用で一般への提供はしていないと説明すると，がっかりした様子でした．

また，GSJからの参加者には，展示場所としてだけではなく，待ち合わせ場所や知り合いの研究者との旧交を温める場などとしても活用して頂けたようです．

写真7　パソコンデモに挑戦中.

これからの課題

地質情報展をはじめとする国内に於ける展示は毎回充実した内容となっていますが，外国の方々を対象とした展示はまだ不十分な点が多く，今後改善していく必要があります.

特に今回は，展示ブースを訪れた研究ユニットの方々より,「地質図に関する展示が無いではないか」とのご指摘を多く頂いてしまいました．確かに地質図をはじめとする出版物は重要な研究成果ですので，せめてカタログの配布や最近の出版物の展示等は行うべきであったと思います．今後は，無料配布出来るようなCD-ROMや小型版の日本地質図を用意したり，外国でも出版物の販売を行うなどして研究成果の普及につとめる他，研究活動紹介についても，研究部門の方々のご協力を得ながら，常に最新の情報を反映して多くの人々の興味をそそるような内容にしていければと考えています.

終わりに

今回出展したデモンストレーションに関しては，奥村公男氏にお世話になりました．また，研究ユニットからIGCに参加された方々にも，お忙しいにも関わらず多くのご協力を頂きました．この場を借りてお礼を申し上げます.

参　考　文　献

31st International Geological Congress (2000)：GEOEXPO 2000 EXHIBITOR'S GUIDE, 44p.

32nd International Geological Congress (2004)：GEOEXPO EXHIBITOR'S GUIDE, 32p.

本座栄一 (1989)：第26回IGC－パリ－．地質ニュース, no. 424, 19-22.

盛谷智之 (1989)：第27回IGC－モスクワ－．地質ニュース, no. 424, 23-27.

清水大吉郎 (1991)： IGCの歴史 (その1)－地質図の色はどのようにきめられたか－．日本地質学会関西支部会報No. 111・西日本支部会報No. 96 (合併号), 21.

鈴木尉元・盛谷智之・広山禎子 (1989)：第28回IGC－ワシントン－III　はなやかな展示場．地質ニュース, no. 424, 35-39.

玉生志郎 (2003)：米国エネルギー省の西部地熱開発の新戦略－注目されるネバダ州の地熱開発－．地質ニュース, no. 585, 47-50.

鳥居昭三 (1993)：第29回萬国地質学会議 (29th International Geological Congress, IGC) に参加して－－アマチュアの印象記－．地学研究，vol. 42 no. 1, 39-48.

Xu, Baowen and Wang, Bingxi (1997)：Report of the Exhibition Committee. 30th International Geological Congress General Proceedings, 36-38.

谷田部信郎・吉田史郎・安藤義路・豊　遥秋 (2003)：第1回地質写真コンテスト報告．地質ニュース, no. 585, 42-46.

MUTO Naoko (2005)：GeoExpo 2004: A Brief Report.

＜受付：2004年12月15日＞